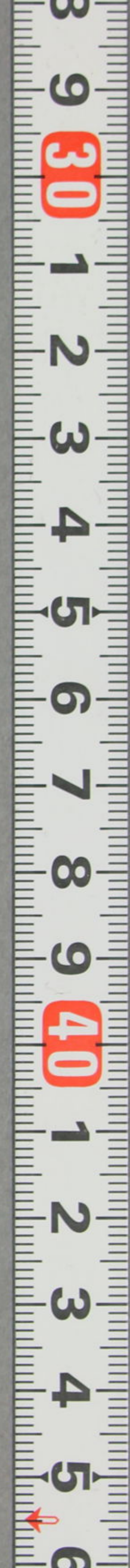


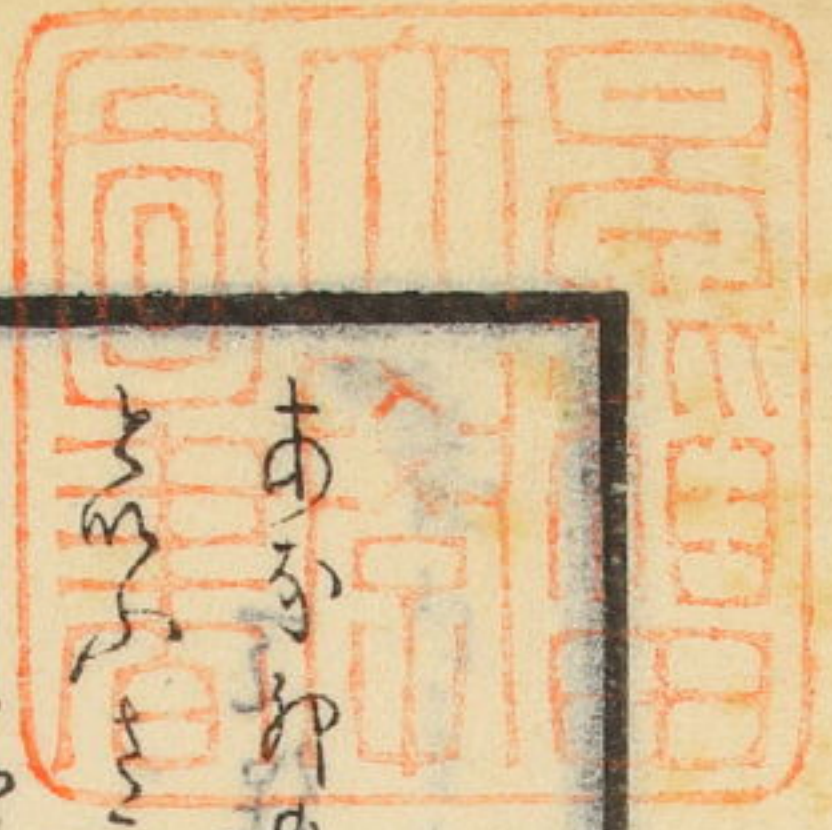
乙二七部集

二

5
2184
2



門の利の
號 2184
卷 25



あふむの流の組もとを講りて位の人あり
まなもえもくあうあう剛は月夜の泳し
あふむの流の組もとを講りて位の人あり
まなもえもくあうあう剛は月夜の泳し
あふむの流の組もとを講りて位の人あり
まなもえもくあうあう剛は月夜の泳し
あふむの流の組もとを講りて位の人あり
まなもえもくあうあう剛は月夜の泳し
あふむの流の組もとを講りて位の人あり
まなもえもくあうあう剛は月夜の泳し



二三

退食のひまゆるしは先師招意のときき免されり
とらふもよき蕉門大家の送詠をとりしの風韻を考
泉もろく平糸平糸の糸雨あまの友人の老孫の御愛と
あつて自注も東山傳の一曲よきおんてとて認す
りゆりゆくあまのき老孫の心傳世の心れをよき
おんてとらふハリの心もよきおんてのおり山のおま
さあふともよきおんておんてとらふハリの心もよき
磨つて磨つての白法をよきおんておんてとらふハ
かわりぬあれん

て保登己な早月

掃窓布席

松のまふ草

招意二説

推雨草掃刪補
斧柯社中校刻

山が花垣根のほらや 亀洞

山が花垣根のほらや

とたふのと押しはたや

冷汁がちまふがらや花の信 胡及

あつてよかあつて

あつてや。や風車は花の信 尚芝

まると中七文字の下よ小糸をいれ

面をかや 押屋ハあしむのさる 越人

やハ 奇

右四内下くあつらうとほむき 花の
片花のときき 菊のきく 菊のきく
俱しやとあつらうあしむのさる

ありあや 初花らりののさる 野水

下くあつらうとあつらう

焼くさや 挿し 花先の 時を 杏雨

あしむや 下戸と下戸とのあつらう 胡及

かさあつらう ちよめ 山只の山 加生

おあしむ 上のやあつらう 松子あつらう

小栞子栗や 松の門 舟泉

中ノヤ 松の門とあつらう 松の門

ふかこちやあつらう 雨を考へ

きくらん あつらう 大つらう 時水

己のさや 昔のきくらん 荷子

上ノヤ 松の門とあつらう 松の門

ふかこちやあつらう

松サウ やわらきあつらう 百景

ヤハ 松の門とあつらう

更。衣襟も あつらう 傘下

上ノヤ 松の門とあつらう

とあつらう

あけくさむらさきや時のおつと色 嵐葉

中七文章の中へあたるや「際」の乃のま

桐のまきやゆらぐのあり。秋のうせ 日暮
ゆらぐと程あはしくやとほし

上「や」をどくあたる下七の下と

まやとあたる代考くまゆ

餅搗やゆらぐのあり 李下

追もてや。程ふらぐ時。鬼の面 荷弁

き車ややゆらぐのあり 亀洞

ゆらぐ時や法を能く窓の月 時色

中七の下へあたるふれをこがの

眼をゆらぐ

五月雨や寝るおのねつらり 釣雪

上「や」とあたるのまて下七あり

「ま」あのかき

表のゆらぐあわわ 荷今

上「中」あてし「ま」つて下七あり

たのれとあたる島十よりハ奥へ

きぬくや余のまあり。むらさき 除風

やとあて中の「あ」か面をきく法

あまや

あろくやまぬくの比。律とまき 昌啓

きぬくの比「律」とあたる

火の影や人あらしきとき細代ち 言水

やあらしき清きも又よ

足お赤い人かかあやばらの秋

あらしきあやばらやあらしきあやばら

ちあらしきあやばらあやばらあやばら

あやばらあやばらあやばらあやばら

日の影やあらしきあやばら 正永乃

あやばらあやばらあやばらあやばら

あやばらあやばらあやばらあやばら

夕まやあらしきあやばら 其角

あやばらあやばらあやばらあやばら

あやばらあやばら

榎ふむきや取莫るあらしき
 江の月がほほはりの削り
 秋うせや浪どあらしき
 あらしきあやばらあやばら
 去来
 山嵐雪
 正秀
 伯針やあらしきあやばら
 あらしきあやばらあやばら
 あらしきあやばらあやばら
 あらしきあやばらあやばら
 亀翁
 名月やあらしきあやばら
 杜若

裸才也。多鶏。と。角。は。規。ど。り。 樗良
 くと。ま。や。幸。ひ。共。禁。ん。ま。ま。う。う。何。る。 公羽
 あ。う。う。わ。か。た。な。な。う。う。う。う。う。う。う。 其角
 叶。四。中。七。の。下。へ。お。と。お。お。お。お。お。お。 何れも
 多。多。の。多。や。ま。の。あ。の。今。何。か。い。や。 樗良
 谷。り。や。心。事。が。い。き。林。の。記。 去来
 多。や。十。の。子。が。い。回。り。の。林。 去来
 橋。つ。ま。や。と。の。傾。塔。を。保。ま。ん。と。 去来
 多。多。き。り。う。う。や。ま。産。と。十。文。字。 去来
 叶。三。の。ハ。お。お。う。う。 作例なり
 多。多。多。多。多。多。や。三。年。也。生。あ。ま。し。 去来

上五ノヤヤありつううう
 二年どのよふあふん

横さのるや山ゆの。時多、
 新と千きくや肉むの。わきす、
 む月さの流や紀伴の。ハ。此。司、
 ちつけえちやま。あ。か。豊。鳴。其。也、
 種。多。も。發。く。や。と。の。市。の。る、
 ち。の。五。の。ハ。や。の。あ。中。七。の。下。何、
 う。多。潮。や。は。い。う。う。う。う。林。の。花、
 田。の。畔。や。虹。と。背。身。う。う。唱。桂、
 元。山。や。何。の。う。う。れ。て。雉。子。の。声、 燕村
 上。あ。や。と。お。て。中。七。の。下。へ。と。お。う。う。う。う。

「あり」 何よ。是よてふ調子あり

美山や五をくはくく糸の声 去来

叶の中七のよきよめてく梅子何となく

別のやぐりよめえ〜

花やふきり〜らぞつと合せ、

や〜〜「突合せ」〜

七夕とさげてやたぐり毎 踊、

中の中七の五句とおめ〜 「あどろ

とが。とと〜

福丘やふ笑もあ〜むが「ハ」唇、

中七かぶ〜と〜〜の声唇の形あ〜

あ〜あ〜〜「ハ」せと〜つふのものを

あ〜ゆ〜ハ奇なり

徳山や若まるふぬよお縁か〜

あ〜の〜の〜笑も〜〜〜

あ〜遠〜木縁も〜と下のもあ〜引調〜

あふ〜や今起でき〜〜〜 傘下

あふ志あや鈴〜りの朝のうら

あふ花や〜待の〜の山の糸

え〜や〜た〜〜朝〜 忠知

菜の〜や〜桂が〜り〜 言水

年〜の〜〜〜下〜 去来

で〜〜や〜でもた〜〜〜 てる。

や〜て〜〜〜〜 去来

池の面々の水もやいへさむや由 去来

あのがやハ去来つゆハ世にふるまぬる
つらなるやいへさむや由とほさるるも
買つ又あろくみはさるもかこ

静さや 鶴。八月。の香。のやうに 渾川

沸くさや 雨。の海。の秋のや 汶村

梅の土。や 鳥の舞う物。が 小夜いれ 史邦

柔。どき。の 依。ま。の ぬ。が。あ。り。の。り 其角

あつと。り。の 風。の。や。む。夜。ハ 葉。の。梅 時

ある時。ハ 土。の。垣。の。も。なる。の。椿。 坡

定。意。の。方。は 芽。が 葎。ハ 月。ど。る。の。 鳴

吟。 癖。る。を。ま。し。る。と。き。す。 春。の。し。り

母と月をいへりて 知堂

あつと。り。の。風。の。や。む。夜。ハ 葉。の。梅

燕村 櫻良 曉其 櫻堂 しののてふたも

んねくはきぬのこまのいす 燕村

黄たのあちこちとす。や。か。来。り。の。 燕村

こ家うちととまあめてとめぬを老成をい

之あしや余は目かか。の。愛。若。山、

やうくのこまあめてあしやと知る

もやのうめつりきやうし

やうしや。す。貸。ど。わ。長。ま。草。

す。貸。ど。子。と。あ。る。あ。て。め。つ。り。き。 燕村

まらむや人住ぐり。あう壁をもち 燕村

うまや中あらし。あまのこころをよき。位で

のでの字老練し。りあらし。はげがけ

くまを睨みて。りまや。あめ

石川やあまひ。は葉多を流か。り

かハるりや。向の女。房こち。り

あ怪と。あや。不ニの。襦袢の。小家。り

ヌあ。が。あ。り。の。角カ。ち。り。り

の。あ。と。り。り。休か。あ。り。り。や。の。り。あ。り。り

や。り。り。あ。え。て。り。り

初。ち。る。や。た。は。ま。き。り。も。り。り。り。 曉臺

菜の。あ。り。や。あ。り。り。を。も。ち。の。朝。あ。り。り

を。琴。ア。や。あ。り。り。の。ゆ。り。り。春。の。く。ま

女。す。り。や。月。は。あ。り。り。の上。に。あ。り。り

初。め。り。や。ニ。ワ。り。り。に。着。り。り。あ。り。り。 燕村

ま。の。字。大。き。あ。り。り。葉。と。あ。り。り

り。り。り

是。より。標。き。の。り。り。や。の。字。あ。り。り

梅。子。宜。し。け。れ。り。あ。り。り

抱。下。パ。た。り。り。き。の。り。り。の。り。り。菜 標堂

月。の。あ。り。り。十。日。を。あ。り。り。梅。の。り。り

春。の。月。む。り。り。り。り。り。り。り。 標堂

七
二
七
七
七

九
九
九
九

春の日のよきばゆて入り日あつた

標堂

人の影をみればあつた
居あつた

漢人ぬ山の梅も園

花もを鶯の舌のりけがら
何れもあつた
花もをの葉あつた
山風もあつた
芭蕉の下あつた

画賛

あつたあつたあつたあつた

悼大魚

是のよきあつたあつたあつたあつた

秋のうせ人あつたあつたあつたあつた

はつたあつたあつたあつたあつた

我輩の朝うけあつたあつたあつたあつた

夕とれをあつたあつたあつたあつた

見えそのあつたあつたあつたあつた

初老のあつたあつたあつたあつた

二日あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

三
三
三
三

七言律
七言律
七言律

りふらなく。パ翌日。パく。ど。あ。あ。り

神々きの賀

月香。が。わ。り。く。ハ。た。げ。南無。歌

撰者

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.

ル右社裏のりやまのり

横雲のときれきりや盆の月

たつもや峰まの鳴り鶏の声

まの待きとひをささりて

戸あきのあささるやなち早炭

八月の老のふをかゝ十あつた

あつたや想もくけの徳の穴

稲妻のうさつくれやうまあやえ

垣あつたふよを懐や苔の月

永き日のえたり春の下り苔

初月や伐り梅をささりて

双之

楊花

早炭

徐逢

不曲

鶯雨

長彦

永園

雨芳

牛岫

七言律

てひひひひ
二二二二
七十七七
三三三三

午
十
七

京中のまのいぢいん 葉の中
抱ふめてゆくはくらのさうり
松竹千日や二夜うらり 杉 鄭
ゆるまや竹の葉も立ちぬる
抱ふ日もあつて産みの園庭の家
まふはくさうききてやあつて
燕まゝ子門の松とく
月ますやあつて 鯉の丘何ろ
鳴の葉 苗竹あつてあつて
ゆの葉子美人あつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

葉平
陶烟
松栗
有水
雨吹
量山
不流
松化
篠流
高山
篠山
素封

ちうとてあつてあつてあつて
すくすくや拂るあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

一南亭

若葉のえこもあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

點牛
蒼文
蓼雨
あ翠
一南
布席
久減
梅室
木木
護物

三三三三

ていつて
たつた
流

舟
地

那牛房も春のよめく茶法所 一 甚
 の魚子あそ怖き 破のめ 蕉く
 川登りか灯を物 月の地を奈 茶室 鳳朗
 茶の苑やまるといまの 畠境 大樹
 神田何れととる 乃も 松ち原 碓嶺
 松芦や日よのあられの 舟持夾 一 具

舟の茶つらぬるも月の上
 のりさか林ゆき舟野も
 まさし世の心もなまるとか
 だしし舟林もよか舟の上
 さらし下もたつた武に舟も舟

新子家つらんは極よまれ梁よまき也をうらちほそ
 をけつりてきて撰とゆふもの用るは建たる家の風のもの
 ゐよあめりあるはなぬあるどらくまかゆがまよんぬる
 ととと文字を何ちつりきき書とよはるるも助評よふと書
 の撰よもちあるもそれとて同くも書此書ハ昔ク師
 乙二坊の書録ま書いあうの日上足布席師信のまよと書
 一とありけると社裏のもの、書か作らんあうるるはさん
 たあのもくもせぬる今ハ書傳にさつるもあつてひとく
 るぞとあつせん一とをさつと一とをさつと其あぎ
 あまをのめあるはハ 一 具茶 一 具

し
二
三

ていれい
れいれい
れいれい

特
十
三

もかきとておぼえたるは...
さきさきとていふも...
このころの...
の...
さきさきとていふも...
このころの...
の...
さきさきとていふも...
このころの...
の...

田原のほ場牛の茶やぐく...
なるお月八分の夕...
生鬘のまきま...
さきさきとていふも...
さきさきとていふも...
さきさきとていふも...
さきさきとていふも...
さきさきとていふも...
さきさきとていふも...
さきさきとていふも...

しんじゆ

しんじゆ

七
二
七
夜
疎

あつてのうたてくしむらうハ予ハ微量らうとく摘撫の功を
そなたのいらりし時をふとてた眼を安てハあはれなり
めたく眼をむいてくれ廿上の人于私ハ因てはさう憾
悔の一言とてかえさるすふらり

東都 一具道人

あつてのうたてくしむらうハ予ハ微量らうとく摘撫の功を
そなたのいらりし時をふとてた眼を安てハあはれなり
めたく眼をむいてくれ廿上の人于私ハ因てはさう憾
悔の一言とてかえさるすふらり

松窓の集本後編

春部

家首

羽子梅やきりくさの室の真山家
白石城主の家の子の赤けす園に
ふるまふあの中を家首をく位あめり
木急也も捨枝おもしろねまえね
いざしれ長崎漫遊のおもひはれ
もつあや進りゆくあうらけの儀
あのをれ趣意のふたあそび
物は何とぞいのかしら

三
七
夜

三
七
夜

七世
十世
天祿

傳
十
七
七

わくせきやと山の裾をさす
七多の七朝まき
五月のうらやまより流はあつた
こころのあはれやまきりけり

西王母賛

さむ姫のしの君ももろくれり

松吟亭

依保姫のやとらとをなすし行の松

柿崎客舎

し姫のま向の齒染々くきしあ

詩言の身本對

川うせのさうらハツてせいのめり
大津路ハハちあつてなまきさの
山阿比のちとてりしと送梅
あつちのやとら梅も川茶も木
梅もまきしあををり梅や斐もまき
あつちや梅崎あるの土佐日記
むはし姫のうめもつたもせ姫のこゝろ

探題ニ句

梅のあつちとてはなむおとよ梅の花
くさうちあつちのさうらやこのめり
春まあつちとあつちあつちの梅のめり
まをあつちとあつちのさうら梅

三二

四

七十四
二
七
七
七
七

うらひまの 霞やめをまききるの月
きよまりしうらひまの 秋の月
ゆり上の 霞はけきよのしゆり上
とらうきりし

梅枝やまききの 芽まは 霞もま
のりのよる 借もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし

七十五
二
七
七
七
七

峰入の 霞はあつらうし 霞のし
あまの 霞もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし
あまの 霞もまきねきりのし

七十六
二
七
七
七
七

七十七
二
七
七
七
七

17
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

苗ややくまきくく南 替りくく

あつれよのなまきりしきまひもまき

かひもまきりれを葉外備のまき

あましむれ 野くくくくまきりしきまひもまき

獨のほろすまきり 替りハまきりしき

昔のくまきりくくの 徑まきりくく

士朗よまきり 丑形まきりくく まひもまき

あゆむハ一冊を奥の口すまきりくく

序枝よあやまきりくく 人のなま

細くちのくくく白くくく まきりくく

まきりくくくくくくくく 山のまきり

か人のまきりくくくくくく けまきりくく

改定せらるるをまきりくく 火のくくくく

まきりくくくくくくくく 替りくく

まきりくくくくくくくく 入まきりくく

まきりくくくくくくくく

焼くくくくくくくくく 葉 けくく

葉くくくくくくくくく 月くく

あまきりくくくくくく 替りくく

葉のくくくく 街まきりくく 葉の 葉

くくくくくくくくく 山まきり

あけくくく 葉まきりくく 葉の中

まきりくくくくくくく 葉まきり

まきりくくくくくくく

三
二
一

六
五
四
三
二
一

山吹花
山吹花
山吹花

山吹花
山吹花
山吹花

ちよとちよセ^{ハキ}掛布——りりり
木の枝のありけきりり
ふの香が 風のくさりのちよちよ
四五六のちよちよ 夜のちよちよ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

夏部

袖うらら ちよちよ ちよちよ
袷着る ちよちよ ちよちよ
薄と刈が ちよちよ ちよちよ
おのちよちよ ちよちよ ちよちよ
おのちよちよ ちよちよ ちよちよ
二入 ちよちよ ちよちよ
おのちよちよ ちよちよ ちよちよ

山吹花

山吹花

山はるの海木もよまきねあかど
 さしけあくさしけいけんどうちやまの
 うぬの松あまししそまのり
 南くさふともきしるの
 舞あや西うらうらあは達ちか
 るら女も鮎約糸ハながらるる

山はるの海木もよまきねあかど
 さしけあくさしけいけんどうちやまの
 うぬの松あまししそまのり
 南くさふともきしるの
 舞あや西うらうらあは達ちか
 るら女も鮎約糸ハながらるる

昔浦ゆきとくしけうら雨三粒
 余の途中意よあしとき彼ハ境電の
 舞あや法師と消つあな水ハ多賀城の
 阿まの畑まのりけね
 考相のまきもさしけあはあまの
 白なるり
 芝の入りまきあろさああかり
 母のあまうらあは
 としあまうらあまのりやまのり
 板あ山のあまうらあまのり

花柳集

家なき世の古きものやとて

ありく—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

旅思

待たせぬ—— 世のもののやとて

余のまねもなきやとて

この世のまねもなきやとて

すゝ國のしらぬ

芦の根も—— 世のもののやとて

之の漬も—— 世のもののやとて

ア—— 世のもののやとて

さかぬ—— 世のもののやとて

たのめ—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

ありく—— 世のもののやとて

三二

三二

七
二
十
三

くすくす

あつぬるをし平川よするあそひに
鮎鮎やまきりあそくはれり

棘林のやをえあうてさる鳥もち
さくさく

松山さくゆけりけりすあそひ

根岸山中入さくきしあそひ
ころや奥のふら目な村のあそひ

すくすく

清あよりむきいりひんし
子鞋の松

出羽と越後の境大里峠あり

来りて山志くらやむけを越の山

七
二
十
三

中園や流る信流はよけある舟
類はえききくはちんあひり
石流をおろりくそめて
道彦り六人をきく
あつぬる上平なり松窓八景人
なり

惟子のあそひやわは水のあそ
くさくさ

小松途中

目やれをそのひやき山の上
きくさくさ

七
二
十
三

七
二
十
三

てつれんが
三十一
七十九

我ゆゑみちのさちありとてうづみ牛の
園架とてみちのうづみ大粒の雨の足
す八峠の茶店あておくる素うな推し
瓢とせしむるさるさるさるさるさる
かきさるさるさるさるさるさるさる
うづみさるさるさるさるさるさる

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
神宮寺川やし舟あゝあゝあゝあゝあゝ
中よ湯を流しはまの木の根あゝあゝ
うづみさるさるさるさるさるさる
笠と着る新うづみさるさるさるさる
例の扉とびきさるさるさるさるさる

休筆

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
うづみさるさるさるさるさるさる
すゝゝゝゝゝゝの侍もおるゝ舟

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
うづみさるさるさるさるさるさる
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
うづみさるさるさるさるさるさる

三十一

七十九

ひびき
七
七

秋部

小湊立秋

旅のちりまじこころぬよ秋のうせ
志のふちりまじあふゆ折しうく
七夕の雲のむろり秋名ぬこのぬ
星のちりまじあき門のらとまじ
立琴もや秋の四すくろよ月のおく
星よかすあふろよあすの辰はうくれ
秋名ぬあふろよ
けりまのあふろや合秋も浪のそ
皇令のえをれきりうく外の濱く

とくしるよまじせのつちりるとて
あふろまの便船をよよのまじり
家々の戸たきまのらとまじり
舟人や旅の士まのセツ起
あふろやけりま横らあふれ
箱のちりまの地れはまれあふれ
まじりよまじりあふれ
あふろまの頭上あふれ
あふろまのより十府のすま
あふれまのまじりあふれ
あふれまのまじりあふれ

ひびき
七
七

七

七十七
七十八
七十九

とうりねひりぢりゝを志のあのみ
 志のあひもちのくト
 志せねぬ天りりませふくつゆま
 三島中九二里をうの石すまは成て
 三つ書と書つてんはとくつてねと
 到れよのくま三の病い何でこの山端
 するともあをんか庄のむとりの
 田入あめろくちんらふ体あめん
 入りくして中あめろくまはまぢり
 日あろくく十の百もぢり
 あま〜〜田のあ〜〜と耕す〜〜

抄写

月の星波のすもろくして書をとる
 茨ち〜〜い〜〜毒ぢり〜〜あめめめめめ
 是ハ表中の白なる〜〜や
 去年を〜〜のあ〜〜何〜〜く大あま
 町つ〜〜〜〜あ〜〜すあ〜〜ぢり
 毒あ〜〜旅〜〜と〜〜鬼柳〜〜り〜〜あ
 下〜〜〜〜〜〜つ〜〜ぢり〜〜せ吹めハ
 中〜〜〜〜〜〜の油〜〜あ〜〜ぢり
 ち〜〜〜〜〜〜り〜〜〜〜〜〜ぢり
 毒あ〜〜の〜〜〜〜〜〜あ〜〜かす〜〜ぢり
 け〜〜〜〜の〜〜〜〜〜〜せ〜〜〜〜ぢり

七十九
八十
八十一

八十二
八十三
八十四

ひ
二
七
三

あつねとつあやわらひのうらみ
極みは次綱木の里よそへ流

はくぢのあつねれ及もあかの秋

ぬのたつとこの木槿の詠と南言

の園にふる小伊勢人の負とくらふ

何れ甲子紀りの時をあすめく

旅のりのまへに海あねののそら

佃一母

親もねおの義や何きのうせ

五位階の位をけきる時からうた

稲らまの一葉もあつねの味の

ひあつねもあつねの小寺のこころあ

まへにまへに井はらやを田圃の

二葉もあつねのあつねのあつ

はくぢのあつねのあつねのあつ

このあつねのあつねのあつねのあつ

あつねのあつねのあつねのあつ

野のまやのらへ網を吹雪る

わらわらとあつねのあつねのあつ

わらわらとあつねのあつねのあつ

ひ
二
七
三

ひ
二
七
三

七
北
北

北
北
北

あこめ

仲秋無月

雨の月ふらふらと夜を月のみ
あつた外うらむまつる日ハ八月
まなかりうら世身も磁目のは
くまりこのうらまをいぢ
名月のまあまらるあやし十三夜
うをせむらうあやむ年考老人
あぐりの春世と去るあらしらの
あま青てゆあられや赤湯の煙
あまははははは
あなをうらむらう今あは月のみ

后の月ふらふらと夜を月のみ

は白の越の糸丹地の何なる

傘の月ふらふらと夜を月のみ

いつの月ふらふらと夜を月のみ

そののあま麻作る今まの月のみ

西時なるあま見せする病の純紙を

純性のあまくらくらく入をき

あまのあまもあまやさん月のみ

連花密まのあま

あまのあまもあまやさん月のみ

十三夜の日ふらふらと夜を月のみ

三
三
三

三
三
三

月代や人ちよわくしとるもれ
宋のたのむまひ月まき月東ら
蘭山風ハ東よるあけり宿の月
川舟とつあ里とるうへ文字指の
海とつおんとして山梅する時
咲稲れ赤もくあさあむらさ
稲もあさうのあむりりあむり
首はほあるとるうまのしーいれり
春とせうへ流るまきとるあめ
雀とつとらのもあむちあむむさ
この月とるうへとるうへとるうへ

便席のまは持の刈らまレレ
糸のなまし持まはあれは
糸のたつとつとらのもあむち
そととつとつとつとつとつとつ
夕とつとつとつとつとつとつ
麻笛とつとつとつとつとつとつ
何の月松韻とつとつとつとつ
きてまきとつとつとつとつとつ
りあさちね物後のとつとつとつとつ
一門の何母九十齡のあえ
十梯りあ代馬とつとつとつとつ

三三三

三三三

七
二
十
八

柏崎重所

初君よりわの葉もささげ

山の目まくらむもめてきり

なす中言事の十日の氣もんせ

とどろあう二涙はあお供

それききたりて

はすり葉もらりてをけそゆかり

ヒモろ中

ちよお根の根引もえろ葉の秋

傘りてくきせり尾をきくのふ

念之

あそむハもれとのなうきくのう

客中

早のちる葉のうもむもあう

ゆきくふもむられり旅のく

たうのうむれり来ぬ葉の初

秋さりや谷の笈れ北下

るの葉のさもふ赤なやま

宇利山

山さやこれとらむの實を枝

このちる葉もむらりて

葉の山のすもあう

いさあうさうさうさうさう

いさあうさうさうさうさう

し
三
三
三

し
三
三
三

七
三
廿
六

まをり人ある家り梅もまき

二 眞法師の位所ハ東谷をハ

坊の名どす

あけ咲秋れつまきいり谷
初鮭やゆわをまきく藤の穂
そゆ流秋をほ音のりつり

柏崎

町中よぬちうと所ハ像ハいぞ
今ハあけくは地のとす一何果
ちらくあくのまをいつわて世
このまをあつるよ
中佛よあわら夢あや待つるよ

貞徳く園ちと雲あや草山
松露まもつたふくあはひか
ま梨のふか山と春のうらま
ちゆくとあわははるは春のね

画賛

琴下塔ハあくれまきなるの山
熱をくまきく待へけるるる
日と雲のくまのまきとくれま
まをわかすなる家物集おとれて
すむまきくくえなるるまき山推ハ
めまきくあまうくまき何とま
まきまきく書のまき今の子らつるる

三
二
二
三

四
林



鬼のあの方うう持はるるや
きりて秋なるうきえな鐘の声

小ちらきこ橋より思来し後らうゆ
うはまさうきとさうう水あが
さうきさうき

芦近のあきの鬼よ妹はあはす
うきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき



冬



世のきりけりの上うきさうき
あはすさうきさうき

繪よするあまの山うきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき

太田系の名よ入時
あまの山のうきさうき

秋ちりよりあまの山うきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき
あまの山のうきさうき



冬部

朽く世の歳時をよるまに
 冬は雪の積りしをよるまに
 山は雪の積りしをよるまに
 水は雪の積りしをよるまに
 木は雪の積りしをよるまに
 草は雪の積りしをよるまに
 花は雪の積りしをよるまに
 鳥は雪の積りしをよるまに
 虫は雪の積りしをよるまに
 人は雪の積りしをよるまに
 世は雪の積りしをよるまに

冬は雪の積りしをよるまに
 山は雪の積りしをよるまに
 水は雪の積りしをよるまに
 木は雪の積りしをよるまに
 草は雪の積りしをよるまに
 花は雪の積りしをよるまに
 鳥は雪の積りしをよるまに
 虫は雪の積りしをよるまに
 人は雪の積りしをよるまに
 世は雪の積りしをよるまに

七
八

九
十

あつちのあつちをたつちのあつち
 池邊のあつちをたつちのあつち
 西のあつちをたつちのあつち
 月影のあつちをたつちのあつち
 あつちのあつちをたつちのあつち
 想ふあつちのあつちをたつちのあつち
 換骨大集解
 ちんちんてちんちんてちんちんて
 輪転のあつちをたつちのあつち
 清のあつちをたつちのあつち

一
 一音のあつちをたつちのあつち
 白のあつちをたつちのあつち
 さつちのあつちをたつちのあつち
 赤湯の里
 松のあつちをたつちのあつち
 あるあつちをたつちのあつち
 君のあつちをたつちのあつち
 盆のあつちをたつちのあつち

三
二

四
五

あをせむらひあむ侍有りとてしむね
かたきうりはじりしあをの伊國の
まきしりあをのまきしりあをの
侍有りとてしむねの茶先愛
水仙や齒乃木愛あをの何なるなれ
亡人のまきしりあをのあをの

素月法尼とあをの骨はあをの

耕せりあをのあをの希皓亭と

あをのあを

あをのあをのあをのあをの
今ハむらりしあをのあをのあをの
あをのあをのあをのあをの

あをのあをのあをのあをの
あをのあをのあをのあをの
あをのあをのあをのあをの
あをのあをのあをのあをの

あをのあをのあをのあをの

あをのあをのあをのあをの

あをのあをのあをのあをの

あをのあをのあをのあをの

あをのあをのあをのあをの

あをのあをのあをのあをの

乙二七部集附録上

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

乙二七部集附録上

春之部

元日の梅の雨をば 一旦 西月
 白りやまつ日きらし 春の 有
 洒掃の利差ありけり 初日 梅室
 女ス梅梅のつらさ入くと 春
 酒先の初日物とみまうて
 月さるゝ梅を初日の序は 一具
 酒ありりの一くろみや 春 多て女
 口上装そのあゆまうと 代の妻 二丘
 牛宿の信鞠を片了 親煮 田草

乙二七部集附録上

田草

親者火くふ白もくたけし親子や江戸氷狐
わら起る喰へ八くりし親者火や京方英
あつゝあつゝ礼者あつちや三本鳥山
羊始とく基盤ゆりく之取さ仙年
抄と呪や礼者あつち先唐日人
叱す雲と、あつちの葎の礼者力里
此等とハものよあまれゆり二錦武
居合せて、あつちの角力宋昭
乳母のよも添ゆりあつちの素一翠
吹消ゆりあつちの礼者沙鷗
太著とくさうしとく奥速イ有鱗
とつ鷗やうけ習とく二幅啓對巨童

春の茶あつちのわら二鳥水鷗此巢
首ゆりくわらあつちの者江戸何少
才のゆりくわらあつちの初暦有何少
もつ暦ね子の中くゆり米廿六古翠
あつちの何おもむき初暦合多蓼雨
あつちの何おもむき福来京梅雨
獨居一樹あつちの唾三時梅雨
此れ我をわらあつちの彼く減今三時此也
あつちのわらあつちの何おもむき合多布席
あつちのわらあつちの何おもむき江戸何少
室のきや孫もとく三時庚年

春奥

宗子けのるちまるとるヤ羽子の巾偏島 祖下
 突ぬるの外へこえるヤ角やまき平 雪原
 喰ひゆる喰ふあるふや松の内平 芦帆
 菖菜やまきけあうもつまし喰 惟草
 菖菜もとまやあうの埃や 椿肉
 菖菜の奥ものふくまき時斗りか 古翠
 食つるや肩の上くく 角力のあ 田華
 菖菜まきつりては神の重 漕物
 子のゆりまぬるけくまやるの上 松巢
 ぬるゆりたまぬるあう 男のあ 可布
 ぬる栗のちりゆりあう 隅田河 桐油
 根はまきハもむりあうのゆり 小松史手 ちうら

出たおれて袴くすわ小松史き 隅左
 木のえんもんきまもりまもり子のりり 米菓
 綱をきやぬおエツ四ツ我のへ 茶静
 舟待も志をいんまもあうあもの越后 五岫
 多栄の栄あはえんく 屏風佐 山風
 万也ああうかうまき 艾のぬ 松秀
 豆人の中も多栄わうまきり 梅室
 万栄の神あうあやまき幕 大巢
 七種やねくまきしゆりやまき 林曹
 舟のねんまきまきまき 柳多
 半分の糸とまきまきまき 糸木

五三七

三十四

よこれ足感控て戻るやわらわ拵 毛上 吟あ
 雑炊くらうを少やわらわ菜粥 新浮 鼎湖
 やくそとの外も 在巽 松浦
 芥つらセ酒よ す 神楽
 凡味つら は 菜摘みたり 貨僕
 七ふさや尾灯あうりの 江戸 英山
 三郎も机 世石 陸月か 堂那
 日と人 無 茶静
 日ア 無 秋臺
 西月 無 多々女
 正 無 祖不

西月 無 松本
 留 無 五韻
 標札の書 在カヒ 芳谷
 木梁の 無 忍山
 け 無 一甫
 春の 無 吟あ
 る 下井 日人
 流 無 子行
 ろ 無 夫翠
 ね 無 對芦

五三七

三十四

凡中のえし 蒸るくもてし 面あり
 切江ゆせ 杭木の かりを あさやうす
 大舟よつふ 小舟の せいのあり
 涼谷 仙臺
 兄蔵の おかしや 遠く 藤の
 多てけさうむ 仕合や 露の
 あきの 何れも 藤の 花も
 掲ふわらう ちり 土筆の 花うら
 ちりて 露の 見えり 遠の
 多の 花さうき ちり ちり ちり
 嵐外 量山

ちつ蝶を わすれ けせ 柳の 蝶
 日暮 柳の 蝶 来る あり 柳の 者
 十万 柳の 蝶
 二月と 露の 花 ちり ちり ちり
 春の 花 さうき ちり ちり ちり
 饅頭 ちり ちり ちり ちり ちり
 子さ ちり ちり ちり ちり ちり
 柳の 花 さうき ちり ちり ちり
 ちり ちり ちり ちり ちり
 夕の 花 さうき ちり ちり ちり
 ねむ ちり ちり ちり ちり ちり
 風 柳 妙水 嵐外 量山

涅槃舎の兩也大くは神の上 昔阿
 ちつ午お二のぬまううハカきりり 祖平
 初午をうぬうや櫓のわさう初 多女
 ちつ午おさう今お中を修くも 月祝
 ぬらうととちねとらうのこまら 岩山
 折菴のちううとらうぬこまら 友之
 燕あうのの櫓とらうハコチ 子流
 四五ハハを築あよとらうこまら 稲洲
 こまらやあのみ中目まらう 徐金
 折角と築をよ修ハハあかこま 松浦
 田の土をハハハとらうあこまら 如あ

こまらとまらハ神あこまら 古翠
 あまらけのぬをちうけてぬ 世地
 丁ぬるああち只のぬらう 詠海
 ちねとあうとらうぬらうあ 丁知
 池あれを何あうとらうあうぬ 謝寺
 あまらとあれとらうぬ江の地 麻太
 初地土平を塚のとらうぬ 南山
 ぬらうああをぬらうぬ 翠
 ちのぬ麻あまらとらう 太櫓

古翠
 西^{上毛}の白
 米芽
 史子
 白起
 林曹
 芳谷
 一肖
 葛之
 祖不

布席
 友之
 二丘
 阜池
 似光
 次峰
 友之
 大梅
 也鏡
 風朗

史十
 子輅
 田華
 松秀
 二五
 無高
 夕山
 丈翠
 壺半
 三枝
 半芭

久藏
 如久吉
 一石具
 未司
 宣草
 五齋
 禾木
 雨竹
 鷺床

港井戸村まき

久藏
 如久吉
 一石具
 未司
 宣草
 五齋
 禾木
 雨竹
 鷺床

三三三

七

池の梅のおくりにてふりのけりる
 神のくまの影のよ余りあつて
 くらあつてとつて声あり梅の花
 小あつてや草桶の上の梅の花
 何とくまの人はあつてつめめめ
 蒼あつてすあつて梅の花
 を日おつてつれあつてあつて
 賽勢をばあつてあつて梅の花
 二本何れを社めくこし松と梅
 家土子島のたつ日やうめの花
 鯛もれはあつてあつて梅の花
 下戸とあつてあつてあつて梅の花

友之
 月殿
 涼谷
 太抵
 手輜
 石府
 荷了
 庚午
 詠海
 水石
 孔正
 今ほ
 薪水
 秋田
 雪解

ちんちんせのそやあつてあつて梅の花
 梅のくまの影のよ余りあつて
 万のの影のよ余りあつて梅の花
 兼あつてあつてあつて梅の花
 け枝のあつてあつてあつて梅の花
 ちのちんちんせのそやあつてあつて梅の花
 さつてあつてあつてあつて梅の花
 二階あつてあつてあつて梅の花
 あつてあつてあつてあつて梅の花
 梅のくまの影のよ余りあつて

斗蓮
 山崎
 擔月
 又之
 富木
 伊扇
 匠月
 上井
 一澄
 一梅
 卷八
 玄子

七
三
九

はるしのはらうくくさな椿うら
花候く霧一丈紅のつとれくさ
とありともいそむ情の接りくさ
心ほ
松油
兼い

ちつとして花も居ぬ柳の
露の目のまはれハのりる 柳うら
お捨り形も芽をあくやあきり
丁知
蕉菱

礼帳の日ありの地もやあ地ふ
ゆれ村子有き足何や柳うら
堅ぬりの沈みくむきふ柳うら
久飛
地菓

ま柳あふりぬくさや風呂上り
賜くやあきりかたや角力より
芳谷
江三

三
七
九

あゝ壘の法後のもりや文やあき
村をくさあし村何りて柳うら
脱去てし着もの着くゆる柳うら
眉岳

永正のうえり松の下り花
日のもも負うる碁盤の目よりあ
上も
栗笑
朝陽

木ありくくけくも田あをあしや
春のあや掃りくく古侍あ
依此

あおれて就とえ遠くあきあわ
井戸うらみ先下りあめて雀の子
時集
暮巻

山崎の櫓ハからあき形もあきん

北条

十一

芝の生美市の千木箱とらぬものと

たゞに今先まゝなる墨のハあつたものなり

津波の棧子 飼くちまゝあめの子 一具

あまぐらうらみきりの打あめの子 素封

一ふきの道ちりちり 素外

まてし一実と云年おけハ柳のむ 愚山

途中

赤山のハ柳うらあまぐらう 一具

菓の花の俯く蛇のうらうら 大株

子を抱く人のつらばたんや 松梅

口うるまて日とらまぬう 五洗

くうく火をかろうと流む流下 瓶七

昔麴子のこのさすや流波の奥 一肖

赤はりちのうらまの日のあま 愚山

ひまのまじりあまの持あつ 史子

岩の松苗代あま 後流

あまのあま 一具

あまのあま 一具

細おや 水戸

あまのあま 故園

あまのあま 久藏

あまのあま 而后

あまのあま 五洗

北条

十一

ひ
二
三

上
七

唱えやあけあけのやちのり
 燈のほや木さるハ見と柳柳の上
 上七 鶯周
 喰ものよしんあともるや乃の森
 一肖
 舞うもろ居るやすし乃の森
 上七 通
 かけらあやほよりのを柳柳
 葎之
 うけあめやなれハさる柳柳
 一首
 妙あきまみ柳柳入りと可れ
 風明
 市の雑ふの唱えと入あきり
 吟
 まらもさの月鏡うけりあ
 涼谷
 余山の雑んあて親あきり
 多々女

余山入き。雑と一原のちまり
 氷瓶
 唱えと曲あきあきま
 舊月
 あけあけの舟の遊りあきり
 春袋
 梅いさしあきとあき初ま
 魯恭
 初まらあきとあきハとやあ
 林室
 りあきとあきとあきあ
 一梅
 梅あきハりあきとあき
 きと女
 見て居ハ声かけあきとあき
 秋豊
 花の海人のまこま
 下十 桂丸
 あきとあきとあきとあき
 湯丸

ひ
二
三

上
七

けしてなほさうらうさう 未刻なる比
きくさのきくさ 俄みくうらうらう
山起す雷 じくうらう 海苔のきくさ 一具

春のゆき 霧とと 起よと 人なほ 疾
けを 疾や 佛の花 業立く 有^{ユタテ}水
帆めく せのきくさ 如日 和や 春の 石^{イシ}鳴

乙二七部集附録

夏之部

枯子くう くらひ 日のさすや 更^{ミタ}衣
親持く 人たり 先み くらく 衣
いばひて ます みる 衣
皆のく 衣 衣 衣
ユます 肌 の 向や 衣 衣
絶く 衣 衣 衣 衣
い 衣 衣 衣 衣

お市の一人二人ハあまらせや 全^全井

乙二七

産の津の戸をぬるるる給わ
 へけの着衣日ハかけれとも給ふ
 給ふと来き足られハあききき
 何所切りと子の根取す。給ふ
 人給の給と山給。小母く給
 あつけと。内人まてす給ふ
 給着て負えせの給。肩力
 多の餅ととつとわ。給ふ
 ぬまて給ふまき。西場
 宮掃の給と。木給。給ふ
 ぬ元まて切て着く。給ふ
 麻太
 木公
 泳海
 多と女
 水瓶
 謝堂
 氏枝
 柳梅
 有鱗
 造像
 柳鳥

ひし子時子時

灌佛や皿あふる。給ふ
 灌仏のぬぬのぬぬ。世ぬぬ
 菓のうらむとのとお月のぬぬ
 傾城のちやう照をやむお月
 傘をけ替ふも。四月く給
 多外のぬぬのぬぬ。四月く給
 ぬぬとよらぬぬ。お月ハ日く給
 提灯とととととと。牡丹
 提て来り廊下をぬぬ。ぬぬ
 田華
 汀左
 田風
 古翠
 一具
 芳谷
 米ぬ

三十一

上五

在巽
 芳谷
 米ぬ

土着あきく 舞中うけ流るらんや
あめくさく 日影さまりて 牡丹うさ
石鳴 丁如

一甫言中

昔葉のえのこあう 蔀の戸
昔葉や 舞の南 旬土ふるも
涼蔀 宇多
は五折の山 家 昔葉 日影ゆ
宇多
卯の花め 美人りや けしき 蔀のわ
高山
卯の花 やおろく けしき けしき
蒼乳
卯のむの 外ハ 舞木 の 春んりや
蕉素
卯のむ や 卯を やむ 人の 御あう
大柳

卯の花や 何志の けしき 卯の花

せうあまの うれて 咲や 葉の花
咲ありや 咲あさり 夕のむ
田風 秀乃外

うきつらき 咲や 舞の 子
め 色 の 楊枝 けしき けしき
白川 文傑
次の花 けしき けしき けしき
松蔀
灯を けしき けしき けしき
杜若
蔀の けしき けしき けしき
春蔀
かたつらき けしき けしき けしき
芳谷
投めくろく けしき けしき けしき
沙鷗

77
三
三

さかすまのこころのちかみのうさぎ

尺雲

あつらひの垣をちかむるのむ

我竟

あけのよの燭あかりのむ

蟻見

うらみあふるふりてあけのむ

国華

つらくと人のあふむむのむ

知撰

と采るいふあふむのむ

采人

あふむむのむ

芳谷

うらむあふむのむ

馬手

戸ぬれあふむのむ

江三

あふむのむ

栗笑

あふむのむ

惟草

あふむのむ

玉扇

あふむのむ

大松

馬頭娘見米藁花

先ツ秋父あふむのむ

古川

むらむのむ

謝堂

沃山あふむのむ

湖山

妹とあふむのむ

月况

浦あふむのむ

布席

つと主のあふむのむ

風朗

あふむのむ

井巳

あふむのむ

貞柱

78
三
三

上
七

具持全の奥も隙あり若楓
 涼谷
 月あともんろ居る所や若楓
 妙勝
 敵立ハあやしくもあつれわり楓
 金蕉
 実さくくや凡上乾ひ雪の面亭
 友翠
 実とくく長初冬ハ落しあつる
 祖文
 遠歩んてともめくあんのわりたや
 而右
 ちうわりとわり柔ふさるる所の障
 風毛
 壁の口のぬくくあつるわりまふ
 桐堂
 沖まははぬくく凡ありる若けりか
 素直

鴨あつる君のくく水の志々り流
 漢物
 ちの家のとおあつる海のあつる
 一之
 海ももろくく新樹のくくあ
 松隣
 下雪は扇のうけのあ思ふ
 推已
 ちのきり出たろくく車坂
 風明
 ちのりろ打場すろり田舎
 尤はき
 待ハ来てあつるもの上や若れあ
 松秀
 ちのきり出たろくく車坂
 万里
 新冬あつる一具茶をこ見まろくく
 寂茶事の種活くくきり
 水瓶

雨あやむは〜の巻や時を 鳥 湖條
 海もろく〜ゆれり。も舟や郭る 春城
 りとまきすふ木うつら木のき〜ゆり 麻太
 初春と何とよ一交り〜まきす 露泉
 庭の推々のも〜もす時を 五硯
 洛中の眠葉さますや郭る 守智
 声くあ〜貞さつ〜むれまきす 日人
 時をあやむ〜とあゆめ埃 椋下
 り〜まきす〜舟烟のあやむ 出雲上 水旭
 響〜や吹んま〜せん時を 友之
 新あ伐木も〜あれと郭る 梅室
 新あ伐木も〜あれと郭る 砥山

緑日のあ〜りあ〜り〜まきす 木木
 り〜まきす〜や〜り〜のあ 抱哉
 老う耳のあ〜あ〜 郭る 大梅
 り〜まきす〜あ〜る〜き〜 田華
 雨茶のり〜あ〜れ〜まきす つきを
 時を〜あ〜の〜あ〜の〜あ〜り〜 氏枝
 他あまの〜ら〜を〜や〜時を 芳谷
 り〜まきす〜大師の遷〜あ〜 水狐
 史あハ森の中あり〜あ〜 一之
 あり〜〜と〜あ〜〜あ〜や〜時を 卓池
 比〜あ〜あ〜あ〜川や〜まきす 漢柏
 り〜まきす〜あ〜あ〜木の手 三岳

甲午甚

有卦み入——左の身みおきす

麻交

あききす上院み花ハあきりきり

抱依

木もあき子あり祝し郭公

嵐外

もやあきあきとさあさりの
木陰あきあきやうし見

あけられハ

大宮み穴りあきさうわききり

久藏

りんこきりハあき書と二日あり

大梅

羊羹の持てれあきあき松魚が

河狐

晴のつ番起すうつり解

涼蔭

あきるわ一交みあきも初松魚

露泉

あきあきも持佛へあき初あき

松竹

あきあきもあきあきあきあき

祖系

あきあきもあきあきあきあき

茅谷

あきあきもあきあきあきあき

鳥伴

あきあきもあきあきあきあき

涼谷

あきあきもあきあきあきあき

石府



暮りかけて婚待宿の 菖蒲くぬ
 傘をうててあきまひく 七菖蒲賣
 今日のあや先んくをうりてし 栗の葉
 昔く 丹るそくくきく 菖蒲の
 明やまきいあやまう 弾のさうり水
 うりあのを比とまわし 肌をん
 うり夜の月まわし まりりきり
 短 魚お 誘る子ハ 香子 明あま
 うりあありまも 知 響の 映りや
 四壁のくくきく ぬと おめく 拙と
 およハ 孤灯の 影と けりく

古翠
 江月
 大梅
 田華
 梅室
 呼牛
 左琴
 虚白

暮のあハ 蒼 迹の 香よ 明ありり
 一具
 肌あけハ 肌ありり 栗の花 夷則
 餌のせも せうけハ 栗尻 くりのせ 歩交
 さげあハ 何の ともすも 柄の花 栗笑
 下りきりの ぬや 苗とる ぬの 香
 むりりり ぬよ 苗とる ぬの 香
 田 植ん ぬき ぬき ぬき ぬき 足 踏 掛
 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
 ろつくと 枝の ぬき ぬき ぬき ぬき
 餌の ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

桐雨
 花葉
 米芽
 大梅
 芳谷
 小枝

山々々のゆめさく声よき田唄うを
 涼谷
 蝶子さ煙引くけりて回るゑんや
 木木
 枚あまろく人を集るる田植うを
 西阿
 夕飯の吞り森内や田植とき
 而后
 今やりの雲もくえすよ苗とり
 地多
 あと春風くおりのそ一ツおろる
 席太
 場通るそさけりや牛の面
 林通
 ふらふらうせ一光はくあまそ
 太橋
 あませていられハ人のあまそ
 对景
 猿人のあつかに差あまそるうを
 赤月
 さげさあに傘の中より柳葉
 夷則

藤のとききみあはれ放するうを
 千歳
 女あ花子稼かゝるやあの阿き
 木公
 木林くま煙あてりあめ秋
 氏枝
 妻の中ゆきに立軒の町家か
 斗世
 梅あらうあのをく五月の晴るや
 鳥秀
 大火の傍江戸子のありうを
 何人あ家あやしうを
 涼谷
 あつあつせ謝をあてての隣目土
 友翠
 坊きして妻あま秋の夕アうを
 卓也
 坊きして溝をあれくしうを

山々々のゆめさく声よき田唄うを
 涼谷
 蝶子さ煙引くけりて回るゑんや
 木木
 枚あまろく人を集るる田植うを
 西阿
 夕飯の吞り森内や田植とき
 而后
 今やりの雲もくえすよ苗とり
 地多
 あと春風くおりのそ一ツおろる
 席太
 場通るそさけりや牛の面
 林通
 ふらふらうせ一光はくあまそ
 太橋
 あませていられハ人のあまそ
 对景
 猿人のあつかに差あまそるうを
 赤月
 さげさあに傘の中より柳葉
 夷則

折ささく 金を煙くや 崎きき家 年 志海美
 崎ききまう 引くけりし 料理人 夷則
 崎の中く 持ぬす 飯のふさく 多々女
 翌日の利え かけりり 崎のさち
 崎屋よりと 携ひさうせ 海このね 椿油
 崎ききや 時わたる 月森の中 惟孝
 山崎しと 多外もよ 崎の破れ 涼谷
 何うせよ ありとる 崎屋の 釣手や 久藏
 とあさくそと ちつく 釣や 養の 崎 冬々女
 あらうらよ 這入と 崎きき 孫入り 芝石
 崎ちりり 田と 見れも 用了 崎 蒼乳
 渡舟の 崎も ありとる 八軒家 巧芝

崎とあさく とも 崎きき 年 五月 米芽
 崎あれて ぼろよる ありとる 一之
 崎とあさく ちつく 釣や 養の 崎 月祝
 崎屋よりと 携ひさうせ 海このね 石靴
 崎ききや 時わたる 月森の中 崎 石靴
 山崎しと 多外もよ 崎の破れ 崎 崎
 何うせよ ありとる 崎屋の 釣手や 崎 崎
 とあさくそと ちつく 釣や 養の 崎 崎
 あらうらよ 這入と 崎きき 孫入り 崎 崎
 崎ちりり 田と 見れも 用了 崎 崎
 渡舟の 崎も ありとる 八軒家 崎 崎
 崎とあさく とも 崎きき 年 五月 崎 崎
 崎あれて ぼろよる ありとる 崎 崎
 崎とあさく ちつく 釣や 養の 崎 崎
 崎屋よりと 携ひさうせ 海このね 崎 崎
 崎ききや 時わたる 月森の中 崎 崎
 山崎しと 多外もよ 崎の破れ 崎 崎
 何うせよ ありとる 崎屋の 釣手や 崎 崎
 とあさくそと ちつく 釣や 養の 崎 崎
 あらうらよ 這入と 崎きき 孫入り 崎 崎
 崎ちりり 田と 見れも 用了 崎 崎
 渡舟の 崎も ありとる 八軒家 崎 崎

七
 三
 七
 七

七
 七
 七

日人

玉扇 柳香

苜舎 崎蕪

石靴 一之

米芽

あしきあそめしあしきあそめし

あしきあそめしあしきあそめし

良自諱龍巖和尚真大陸福島

大田寺住僧也一具愚春之法嗣

大費

あつきのや日傘つら

あつきのや日傘つら

あつきのや日傘つら

花洲

あつきのや日傘つら

一具

あつきのや日傘つら

あつきのや日傘つら

あつきのや日傘つら

あつきのや日傘つら

萬之 青芥 田華 太賦 松由

男林入あつきのや日傘つら

あつきのや日傘つら

あつきのや日傘つら

あつきのや日傘つら

あつきのや日傘つら

久職 蒼史 涼谷

さ〜さや細くもれ〜の奥人 五十一 拾言
 ま〜ま〜 鼻ハ 妙なりそそ文書
 好姫子おまの 向きなり又さけ
 啼むなり 籠の 虫床より 今年相
 朝りおの 地〜〜〜〜
 せ〜げも 虫〜〜 奉行小
 夕立さ〜〜 志保 子
 夕立や 怪あり〜 起 志子
 簞子著 あり〜 又立 菊 保
 投げ〜 行棧 吹波 志石

東内ハ火とら〜 法あり
 あ〜 棧の 実芽 月 峴
 沖の〜 虚 夢 見 汝 脚 下
 虚空呵〜 三策 何 不見 汝 脚 下
 あ〜 造り あり〜 聖 伝 律 師
 子の ぞ あり〜
 蟹の 目の 伊 達 一 具
 首は〜 蓮の 花 田 葉
 袖す〜 蓮の 花 大 梅
 多〜 目 の中 信 あり〜 久 職

七三七

七三六

むらりや虫札申りくくつ
双南

紫陽花のあまき樹くの春谷かたり
涼谷

苔の下みあつ子咲ね大井川
一具
馬蓼

大和めぐりの時
何りの塚のあつらうせいの声
愚山
鯨口の猪あし声あり塚のくま
大貫
帆のくまあつらうのあし声
椿海

祝の物くはハくくくき菓が
困く見くくき菓舟てハくえぬ
徳雲
蒼虬

蛸牛退くハくおや舟あり
うらみ茶世れとありし蛸牛
風朗

くつくりとあきく柄敷や蛸牛
くつくり這くや桶登の道具箱
月流
此物
くつくりよくく世ぬき巻れ危
風石

好焼をつげれハあゝ麻の子か
夷則
日のさすもま
木陰の麻子か
波文
旅人あまの火をりす思射系
石府

子子のありきけりあゆみの庭
 やしうこしゆく西あやむ
 米橋のちきりてきくおぼや
 制札の一の字あふとのも虫うか
 かるの子の目とおももすら浪の夜
 谷地ゆきゆききく声おけり
 をはゆきゆきゆきゆきゆきゆき
 傘をさすゆきゆきゆきゆきゆき
 芦系よあゆみのゆきゆきゆき
 川と先のうちよゆきゆきゆき
 貝谷
 涼蔭
 古翠
 日人
 布席
 夕何
 秀外
 大貫
 一毛
 相半

卻す流あきくよ黄を老くゆき
 借りてあゆむとせ鶴舟てあゆむ
 六浦の漁家よあゆむ六日あり
 志やゆきゆきゆきゆきゆき
 夕やゆきゆきゆきゆきゆき
 遠山ゆきゆきゆきゆきゆき
 甚ゆるゆきゆきゆきゆきゆき
 くらゆきゆきゆきゆきゆき
 めるゆきゆきゆきゆきゆき
 柚の花や社壇の先の秋月
 志梅やあゆむゆきゆきゆき
 葉何
 林曹
 氷瓶
 氷瓶
 宇宮
 氷瓶
 田草
 大貫
 古翠
 黙也

七三三
 二二六

78
二七
三

はるのふれ人ハありて
友之

後波の山を遥かありて
久藏

うけあつてとらうりま
久藏

不二川の裾にあつて
友之

身辺とらのあふありて
友之

日光山

おとあつてとらうりま
久藏

舟着桂裡の祝髪ありて

常時よきありて

かくと仲別もとらうりま
一具

言橋乙亥り家はとらうりま

提斧のさうき中ありて

あつて月や鶴のあつて

言茶都飛とらうりま
一之

日南とらうりまありて
茶谷

駕のまをたありて
月峯

あつてやありて
涼谷

あつて魚提てありて
小園

あつておやありて
涼谷

79
二七
三

松栢子日と二なるらん 桐鮎 三冬 松雪

持智の扇とく切すめ音の家 雨 三冬 雨

思のんは因のちしくや秋ちうき 史子

新日南ちく秋ちうき 聖梅木

人のまきうらうらうらう 茅の掃水 椿海

雨のちうき 風朗

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

乙三七部集附録下

秋之部

身のつらね秋のちうきや秋のちうき 太篁

日のあしや夏ののちうき 秋のちうき 大費

きんくくく秋のちうきや 日人

秋のちうきや月あけきと先 桐雨

初秋や 鳳朗

を朝の秋 大梅

吸売のちうきや 蒼虬

きれちうき 野場

三三

下

五位のつらきものやをねの秋
ちつ秋やお粉ふきくる萬の非
と朝の秋居りまゝして人をとま
箸とけしきくちゆいさうの秋

新
二
三

る三粒あやゆき星のまぐね
青竹の男花活や星の病
乞遣ふ外のもやまきり
首とつとゆすやあふの銀河
城の系馬子もゆるやこの河
河ありくあこくわここの川
ふたご盆とをもきりさうの河

田華
一肖
占翠
二丘
梅室
ね燕
黄山

かゝれはくそとめくくくこの河
るゆくハもあまけらあまの河
栗桿も穂首めくくこの河

つまを
湖山
北島之

玉造みく盆舎の比

ほや〜〜わたくしを旅のゆきま
百里ゆき〜〜る旧里の母の

新盆干

世ふあさハあれせぬ〜あ祭
玉柳や乳の〜ゆるのえきま
お柳やま〜おま〜唐〜
その〜比旅〜して墓ま〜り

一具
檐月
吟あ
ちうら

五柳の下七目まらり米二俵 多を女
 柳經や小僧のくちの年りり 而右
 知る人子脊たぐりあぐ灯籠や 俵均
 明家くも見るる子灯丈灯籠や 水狐
 燈籠や油さすりも人ふりり 鴨居
 灯籠やんこもさすりも 隅左
 抱あかこ子の年や灯籠や 芳谷
 あつらへるるも思はず益の月 多を女
 横をのさすりも 益の月 ハコシ
 やまこりり 益の月 ガカ
 あつらやまきえり 一と 多の風 三本
 送り火や圓のや あひの流も 史子

盆をとりよあまハ兄人 まわり 土丸
 市上 あのまき 反 あ 籠 踊 る 氷 狐
 あつら よ あ ま り の 物 子 合 せ る 京 黙 池
 蓮の あ ま り あ ま り と 何 り 踊 の 舞 捨 目
 牛 る の 愛 賞 辨 る や ま り の 形 木
 塚 合 を け め け て あ ま り 降 る か 冊 堂
 今朝 煙 を け め け て 入 る や ま り ハ コ メ テ 雨 村
 若一王子宮祭礼王子村
 禊堂七月十三日
 実子神のまき あ 祭 る 一 具

念佛

累々くお暇しとねさくらや 一具

題目

ちちうけく他宗のそしる浦小
さくら子の神くらさくも柳熱后や 羽白

亡師十三回忌

とりあけてるされハまき一葉ふ糸 一具

森るあきうさうさう桐の一葉うら 田華

あさけの舞るさるさるや月の相 風朗

さくせの暑の中や相印と葉 黙池

留ま待る結と出さす桐一葉 久藏

一葉あまゆ合かいらや庭の口 松秀

一葉あま 一葉あま 庭の口 大費

杉あしや狗の遠くさる相一葉 太拳

二月も二月も 柳あまうり 史子

あゆまう結りのつら柳や 太泉

山うけの木槿ハあし 西帘 風毛

むらけ咲町や城下の刻余糸 一具

望まのそ跡じまや木槿 一肖

中くみ上雨のある木槿二本あり 萬葉

あゆまう結りのつら木槿二本あり 中外

八月のあさうらを根る葉や 一栴

七二七

七二七

廻文

はつと来つ時疾のまの月影を

松海

表より素内とつて夜あゝの声

朱文

魚の音おきくす灯のくつまかり

水楓

蟬の音おきくすのすのまのあゝ

南濤

虫の声おきくすのすのまのあゝ

葛之

まらぬはつとや小庭のまの月影を

多輪

隣のおとこおきくすのすのまのあゝ

而后

おとこ居る根このつよまの月影を

一具

三斗小泉の温泉あゝ

秋の蝶をさしきくすのすのまのあゝ
人中をさしきくすのすのまのあゝ
おとこ居る根このつよまの月影を

多々女
藤太
時景
波文

喰ふものもさしきくすのすのまのあゝ
神楽外あゝさしきくすのすのまのあゝ
訓れハあゝさしきくすのすのまのあゝ
おとこ居る根このつよまの月影を

仏兄
氷楓
杉竹
松海

六十のまの月影をさしきくすのすのまのあゝ
鬼灯の音おきくすのすのまのあゝ

得燕
松秀

持ユまゝして虫をばらる西風は
松秀
沙鷗

る洗ふ 盥 于らる せし 一人
五韻

おのきくしとおみ伸すや女市部
御幸

栗株のゆゑもくややせし
一具

やうあし 芒ハ刈り とききる
庚午

桐の葉ハとくあはるる 殊暑く
忍山

のころもくあのおとくああ
應了

町風とくあやば暑のあも
木木

雄川あらし

秋暑き中まゆるあまう
梅室
大枝

あまう 二百十日の夕日
保袋

あまう 二百十日の夜
一具

出制 一人ハ羽のあも
布席

あ月やまぬハあらし
湖條

あ月や袂さやけの茶一升
惟草

あ月やゆき せし 早暮小判
氷狐

あ月の曉ちりし せし
西月

雪さらし せし せし
子輜

し三
七
八

下
二

廿八あく晴るる 宜休 月見の
 有月
 廿九月や祝とる 暮る 舟とふゆ
 廿月やあそび 八米子 先達のあ
 廿月 夕山
 朝日くくわわく 今月の月
 三暮
 穜井の庄あちりて
 百里来りまじ 初月の云り中
 栞室
 廿月や二階のくのさきまき
 夷則
 廿月やあまのあとの袖の黄い
 應
 初月や佳く 命をあらう
 外岫
 出津の祭祀 ぶとあま
 八かあちり
 書ふ子に 鼎足形の月見うけ
 咫雪

魚は

廿月の新ち 初月うけ 休ふ里
 つきせ
 廿四日
 廿月の初り 宜休 夕暮りあ
 拾休
 垣越く 暮る 懐や暮の月
 永圖
 入く 月見あちりて
 月のきき 海まき 八見ん 袖あき
 田草
 むらさん 月見 初月 稀ふあ
 一具
 寂中 月見 来り 仲あ ちあ
 椿海
 築の魚 月見 焼月 又うけ
 田草
 月のすすり 突く 月の迷
 芦帆
 き先を せら 月の光りあ
 一肖

七
三
七
三

我島のさきへりさやあの中
 石府
 くらや東八倒れこ霧の中
 碓嶺
 かつや門をゆるれ吹拂か
 相堂
 魚かつは土の解や霧のかり
 大楠
 おつややまこころわき並り上
 尚山
 霧とりのあさるまきやあのも
 宿堂
 戸をさせたあさるまきあのも
 岐雪
 廿のありのあまるとまらうあふれ能
 怡兮
 十六島の詠川あさる
 梅室
 白くまの五十歳のほまきあ
 雨の
 霧をたよしけりまらうまきあ

病中

あまや日くけあはぬ草むす
 鼎湖
 あさるまきと古々人お
 一具
 りつあさるまきと古々人お
 一具
 市中のまねこわくん霧の中
 巢平
 ああさるまきとああさるまきとやむ能
 黙池
 吹縮ゆまきとまきとまきと
 木司
 伯人子茶を入させまきとまきと
 一南
 わるまきとまきとまきと
 木木

七
三
七
三

下
十

あまのさりのえいさなれ〜一ノ声
松葉のむるまぢり〜風の音
むつ〜と紙情着る。あや一ノ声

山雀お推の木一本ぬれ井戸
木通あ〜り〜りやれりりる
柿の木お先着は〜りりる
也 籬

遙々東北のえさをむ
あらの山おりきりや〜りる
一 具

は〜ハ来て晴吟〜風船の綱
大 巢

あまのさり〜捨〜る籠や赤晴吟
草の葉おぬる〜よら〜り赤晴吟
生塗の夕々さす〜あら〜んや
一 長
尺葉
芦帆

総〜りのほれまの〜や親の家
鶉の草の葉の果や総〜り
総〜りのあ〜り〜てあ〜る葉の葉
一 具
涼蒔

鶉のや牛の脊を補す紙はは
鶉のやあつ〜りや〜きお紙の吹
紙屋のあ〜り〜り〜鶏の籠
皆あ〜り〜り〜鶏のさ〜りりや
洞 天
風 毛
江 三
木 司

あのごちん地をいぢけてる勢政

英山

所思

縁日のものもあつて

一具

あつてあつて川をす

久藏

深あつて船をつつ

徐全

追あつて面か

也徳

まづりあつて

琴清

子搦の極のあつて

あつてあつて

旅人あつて

雨吃

門のあつて

方居

猪のあつて

あつてあつて

一回あつて

弘法あつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

引くげいあのもゆるや麻の声 花撫
 まつ鮭や肉の半は到来す 栗笑
 もゆるゆめ今登るじりニも鮭 白水
 市めくまれもかかれし葉の花 十馬
 春と津と津今せやまらぬ花 保袋
 雨の中入ぬ雨をさかぬ葉の花 壺是
 雨の中入ぬ雨をさかぬ葉の花 春は
 雨の中入ぬ雨をさかぬ葉の花 蒼地
 雨の中入ぬ雨をさかぬ葉の花 越后 芝蘭

あよとせぬうち葉をます木あふ 舟巢
 めのあきき日の上あや葉の影 太砥
 めのあきき日の上あや葉の花 夫則
 舟のあき枝くおやきくの花 左琴
 枝のあき枝くおやきくの花 左谷
 甘道は細中のきくや后の月 水戸 十中
 舟のあき枝くおやきくの花 橋周
 舟のあき枝くおやきくの花 一菊
 舟のあき枝くおやきくの花 真旗
 舟のあき枝くおやきくの花 久職

唯柿くして取寄ふる人や豆腐策
秋あれもさうく楓の思もさうの
葉もさう房もさうさうなる
くさけくも揺る表寝さぬあめ
郊の宮佛の森のもさうさう
立角 久職 朝陽 芝草 美取

別墅

戸のくも未枯の外何も
あつりつともやうなる
秋のや葉穂の花の咲時
夜もさうや衣拵の装束のさう
美衣女 三齋 咏秋 波葉

木の白のみのさう
目もなすあるくあきの
秋の夜もさうさうさう
あつりつともやうなる
草穂も一本もさうさう
春もさうさうさうさう
春もさうさうさうさう

久職 大楠 芳谷 多女 桐州 松秀 左琴 野景 柳磯 久職 並栗や日くさうさうさう 虫の声

今更の戸も暮る秋のうせ
 舞乃木あす母のまゝもや秋の風
 ありやまきも暮るり秋のうせ
 秋のうせのねるやや鱒のこち
 つもむるく舞のゆくり秋のうせ
 あはるけ暮るくの秋のうせ
 安海の神お侍あくるまの
 縁店みやと
 木のらと家あくの元は深かり
 雀下りて詠みゆく時分りけ
 あまの山るの中りくはやく

冬名
木司
擔月
宇智
愚山
謝巻
久藏
鳳石
怡守

ひろくのまきとあがり秋の山
 多所の吹まがりもり秋のや句

東橋
得燕

山ハ山里も里あて秋のうせ
 夕のれのとくき中も秋のうせ
 以秋やあつて遠を撰ふれ
 あつてあつ大工もやあつて
 橙やあつてあつての葉やま

史子
松俵
夕山
藍外
一具

稲書や埃の下のを声
 あちあちとて稲書の葉が
 稲つちおあつてあつてあつて

木司
賃僕
詠帰

稲妻や焼子何げなる舟の住
多と女

くくく人皆由りし餅の市
久藏

ゆくゆの着衣不と晴るる月を
つぎを

秋のせのそく時ありし月を
梅室

とてのこもるる月を
山

世のこもるる月を
史十

世のこもるる月を
野鳥

世のこもるる月を
東洋

乙二七部集附録

冬之部

柿の葉をもちけりし時
多と女

種ものへ貸つてす市初し
朱太

賣子あつておもて物さき
一市

おくくの曇るるハ末物し
林曹

強信の二利毛三利毛時
ちりち

芦くさつげハ表くさつと
氷狐

夕月と表くさつげハ表くさつと
多と女

業習期りあつてす市初し

まきこ後や表くし袖味噌
一具

七三
七三

つら木枝解もどるしんわ

怡兮

海晏寺

みまろくく志くわくくあうう

多井

多茶の且く坊をくく

水所

字一茶ご町向くあうく

一具

阿くくうま茶や茶山の町色あ

瓶山

くうや木や日のくく也を地せ月

茶田

まを廿時あけな茶や山の嶋

僕物

まあにや伊吹下風く孫あ

茂権

あ仙ぬ木のまのくくの下坊の行

田草

あ仙をまきく持てあ。小者う

大梅

あ仙はあまあてくく花のく

藤山

あくくくくく新あるありあ仙

平権

あくくくくく茶肉やあ

菜民

あくくくくくくくくく

高居

あくくくくくくくく

春佈

あくくくくくくくく

月歌

あくくくくくくくく

惟草

あくくくくくくくく

月歌

あくくくくくくくく

賽馬

七三
七三

七三
七三

七三
七三

た
三
十
九

根のふきとてきりては葉の枯れを
 家々や本堂ありて日の南る越后 史子
 世に木も昔よとねあるやふ落む 一甫
 修の系や日の写る月の中 井草
 今朝あきとあるとあまうと枇杷花 春徳
 けりまに廿律のこゆるるをい 誓 左陸
 菫畑の中あききり糸帯り糸 謝堂
 中庭や主もあつたゆり花 流史
 めのさして負きつる流るるゆり花 夕山
 瀬沿うあつた赤飯費やゆり花 麻衣
 流るる木もあつたゆり花の南る 史子

やらうあるは所の藤あやあつた梅 咬之也
 あつた梅のなつとえりつるあつた梅 葛之
 ききたつと梅さきり葉やあつた梅 也鏡
 店の葉あつた梅のさきり木立 鹹年
 旅人の子あつた梅のさきり 氷狐
 里くつた梅さきり葉のさきり 白桂
 あつた梅のさきり葉のさきり 大梅
 戸あつた梅のさきり葉のさきり 松秀
 祖父と孫あつた梅のさきり葉のさきり 也鏡
 あつた梅のさきり葉のさきり 薪水

た
三
十
九

た
三
十
九

た
三
十
九

ひさし

市中や人声あはれ

氷瓶

獨りけり着せしや夫津

葛之

耳とあつたあはれり夫か

宇多

雞隙はや物もまきし夫か

茂隆

押しつゝもる林やあはれ

涼蔭

江戸も居る心もするや綱代

宇多

川筋の中る心もするあはれ

一具

あはれやあはれ梅の咲あは

涼蔭

あはれやあはれ田のちあは

宇多

あはれやあはれおとまり丸裸

大貫

あはれやあはれおとまり丸裸

一甫

あはれ香のすくひのすくひ小春

島山

鳥草田の畦も小春をうたつた

虫丸

聴乃敏示もあはれ小春

宇多

あはれ何をおろせたら小春

田平

あはれこの侍もあはれ小春

大貫

あはれこの灯もあはれ小春

二丘

あはれ声やあはれ小春

お輪

あはれ月もあはれ小春

徐達

此

此

里のふや沖糸をくして木子上る
昔の鳥の初ねや里神楽

鳳朗
山阿

芭蕉忌

初ねおき舞ふあぐりの故うね
不二のまを流波の回るどらうあ
川形はあまの力の声のまうをさう
ちううううまの集ゆや小夜もる

久藏
田具
祖平
松秀

鴨鳴りや十万石の仕付けぬ
とくうううあて並ふ小鴨の

久山
蒼虬

押よせの上にとくすね小鴨もる

荷乃

梅の花おあがりあうね
あつらりとねくや外の鹽形

一具
大貴

一徑老人あまううううあう
あまうううあううううううう

併みくつやあああ
あゆくや音をききとあ乃声
はんくと改中通すやあなあ

一具
有一
松秀

まの雪のあうと永松木乃り

あ〜〜〜きこ〜〜あゆ〜〜朝の雪
 ちつちつや味あきものや喰ら〜
 初雪や切封ハ〜乃月〜あり
 外柳の傍掃除や雪あり
 雪ふ来るは〜先そ春の梅
 大い乳指も雪や雪あり
 今靴の雪を〜雪も採り
 花苑の雪お〜雪や雪あり
 雪の雪あり〜木陰ハありけり

一具大
 忍山
 湖條
 葛之
 蕉夏
 二三
 一宵
 友之
 咫雲
 雪夏
 石府

つむぎや〜わき〜きぬの〜ち
 花雪の中〜日の照る〜尾花〜
 ま〜掃ね〜ま〜向か〜
 雪掃〜曲〜於遠地〜
 吹簾や〜雪〜雪の〜
 雪の上〜雪〜雪の葉
 三社や〜の河
 雪を〜雪〜雪あり〜
 雪あり〜雪〜雪あり〜
 初雪や〜雪〜雪の声
 今は〜雪〜雪あり〜
 雪〜雪〜雪あり〜

からみ
 五歌
 多と女
 久と
 月歌
 惟子
 氷瓶
 枕後
 折花
 一具大

三三三

三三三

乳を何く子ハ余念あり措けり
猿也せとせしやう措の代をう
しつめや痺もあはる度さう

大費
柿室
友之

とりのけさうす目後やあ火焼
る初や風呂と火焼の言さあ
ゆやうと向き初をの巨焼う
疎よりもあく集つて巨焼う
あちんふあふのあらの巨焼う
あやんく巨焼う入やあうり

田幸
多七女
吟泉
松秀
愚山
双居

出灰とりあまも中くおめり

松秀

戸も春のあうくうらなちり炭

系

物鞋の柱をたうくあうり

二洞
寺子

指くあてささむゆり
あむせす辞事もせむく
箸とつら子のく呼や
月さすや並る
北而て鯨ハいのちを拾むり

久藏
八重女
珍化
虚白

むつとあつたまゝなるもおとね

世しめおのてらふあれハ

我な子鮎鯨 まらぬ人もあ

久藏

つくとちりわきんるり鉢部

戸

一獲

乙原さ免ハ待集あ朱や柿部

花推

今元ハハ暮あり門子柿さき

田華

さきあやまハあれ紙の鉢あき

子輅

牝面の牛房大楳や西妻月

古翠

伯名や日も待集あねああ

省吉

土万あく遠も吹草まらりや

久藏

狼さのひやまあくるあ衣ハ

左琴

猿好と人よハをねる紙衣ハ

氷狐

わきあくる頭巾あくる居きあ

多し女

足代の纏あおとくあさや

秋堂

炭じりのとみある 這入き

松濤

盞ものさくらんあろうるまき

壽堂

灯の喰物てきくハあま

鼎湖

らくらくらたまきあさうらま

湧流

宿引み栲紗うり紙まき

波文

あつらひく雀も鳴やまこの入
 極月や衣被ふつく茶筌賣
 まゝぬく猫のせきゆくはきや
 石を落す捨子の内や冬の月
 速来りる祖父代りうあそぶか
 掃じふ一るめくや焼の宿
 まつたきや大黒柳子く免の花
 まつたぬやちよろうり祝のまゝ祝
 まつ掃むまゝく世くるお理居ま
 伊勢傳の四世とむきんり年忘
 栗笑
 涼茶
 吟歌
 葛之
 一甫
 万葉
 木本
 吟歌
 大巢
 五岨

古曆はひらけり大徳寺か
 昔季の毎日常れく尾まらけ
 月祝
 西馬
 一具

掛乞のらひまの上や鶯の声
 掛乞みらせや妻のくまら徳
 むらゝるくす柔一あくまのせん
 笑
 友之
 不曲
 氷狐
 笑
 文
 笑
 文
 笑
 文

舟とてははるる舟ありやう舟
 友之
 炭二俵舟のうやけやきひと
 洪石
 何よりも先たりよき手のとて
 而石

舟とてははるる舟ありやう舟
 友之
 炭二俵舟のうやけやきひと
 洪石
 何よりも先たりよき手のとて
 而石

先師松意を識るる舟とてははるる舟
 の舟とてははるる舟ありやう舟
 友之
 炭二俵舟のうやけやきひと
 洪石
 何よりも先たりよき手のとて
 而石

さるる書物に終りたるを能く見たりと志す
 吾の心骨碑を身と爲しし事ありしをわが人の
 さみちむく事ありと志すなりと志すなり
 さるる書物に終りたるを能く見たりと志す
 ひれんとしよと志すなりと志すなり
 加へて志す照書の利益ありし事あり
 して志すなりと志すなりと志すなり
 吾人の心骨碑を身と爲しし事ありしをわが人の

乙之七部集と擧ぐし其志ありし事あり
 ありし事ありと志すなりと志すなり
 七十已前存本余ありし事ありし事あり

明治廿一年九月
廿二日
東京

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

明治廿一年九月求版

編輯人

故人

為誰庵由誓

新潟縣平民

凌行人

目黒十郎

古志郡長岡表四ノ町十九番地

東京

發賣所

全支店

京橋區南傳馬町二丁目五番地



